

昨年度の選考評において、「口語」の領域には、まだまだ未知の沃土が予想以上に広がっている」と記しましたが、今年度の投稿作品を振りかえると、そんな「未知の沃土」を予感させるような作品に数多く出会えたことが、何より嬉しく感じました。

新しい言葉の感性を携えて登場してきた投稿者が何人もいます。その一方、これまでの奨学生のなかには、すでに作家と呼べるような域に達しつつある方もいるのではないのでしょうか。

選者としての私自身も、〈選〉によって試されていることを肝に銘じながら、これからも各々の多様な〈可能性〉という点に注意をはらいながら、選考に取り組んでいくつもりです。

次に、奨学生に選出した方々の作品に短評を記すことで、この度の選考の責を果たしたいと思っています。

松下 誠一（大学生）

- ・祝日はひとえに昏れて手の淫ら
- ・芸名があれば湯船に浸かれます
- ・水槽はさびしく満ちて月に影
- ・空洞のからだを野辺に診てもらおう

昨年度の口語詩句賞奨励賞受賞者。一貫して川柳体で発表しつづける作者。昨年、俳句として選考した際には疑問に思う表現も見られたが、今年、あらためて川柳として眺めると年々熟達しているように思う。また昨年、指摘したコピー表現との類似性からも明らかにふっ切れたようである。新たな川柳作家の誕生さえ予感させる作者だ。

川上 真央（大学生）

- ・こわされた一人称で／歩くとき／あなたに解けたままの靴紐
- ・冬の朝／あなたの母語の音階で／少しふくらむわたしの名前
- ・夕焼ける／ように／毛布をかけられて／あなたに託したい街がある

今年度の奨励賞受賞者。主に短歌体による作者。どこか危うさを含んだ、青春性と呼べる瑞々しさに溢れた作品に注目した。ここでは「あなた」という人称を含んだ作品を抄出したが、そのような場が作者にとって、かけがえのない根拠と呼べるもののひとつなのかもしれない。今後の展開が楽しみな作者である。

ムクロジ（大学生）

- ・年明けて／McDonald's の D を拭く
- ・空っ風信号全部青になれ
- ・自転車で踏んで蛇かもしれなくて

・けんかした手が天牛に触れている

今年度の奨励賞候補になった作者。俳句体の作品を抄出した。定型を巧みに活用しながら、ふと日常に訪れる裂目や異和の感覚を捉えている。また、俳句的手法のひとつである写生により、ときにトリビアルとも言える光景を捉えながら、不思議な世界の感触を表出させている。今後の展開が期待される作者だ。

雲理そら（大学生）

- ・うつくしい群れに馴染んでいく人／に手を振ったって笑うだけだよ
- ・トゥインクル・トゥインクル／手技は見えなくて／あたしが幽霊でもよかったの？
- ・その橋をわたりきれない声たちが／光るぶんまで手をふりたいよ

短歌体のみを抄出した。どの作品においても、口語文体を自在に活用しているように感じた。たとえば文末の「よ」、「の」などの選択のためかもしれないが、相手に対する呼びかけ、あるいはダイアログへの志向が、すでに作者の文体の根幹にはあるのだろう。軽やかでありながら、批評性を秘めた短詩にも通じる文体には可能性を感じる。

互井宇宙論（大学生）

- ・木の瘤に木の呵責ある銀河系
- ・雲丹飲んでしずかに紺となる夜空
- ・雅歌だけで育つ鸚鵡に騙される
- ・からくりに似てからみあう霞草

俳句体のみを抄出した。漢語や音韻の活用など、言葉そのものに対するこだわりを感じさせる作者。どこか現代におけるマネエリスムとも呼べる気配さえ漂わせるが、定型そのものから立ち上がる魔術的な世界には注目させられた。

高田皓輔（大学生）

- ・真似すれば鴉に私に喉がある
- ・水没のまちにひらがなだけのこる
- ・吹き替えのような水辺にふる小雨
- ・近づいてみれば蟻から蟻が出る

俳句体のみを抄出した。ただ、俳句の特徴的な手法である〈切れ〉は、あまり目立たない。そのことでシームレスな読後感を与えながら、省略による強度からは世界の不可思議な手触りが立ち上がるようである。

快名（大学院生）

- ・つまずいて／ふと出した手は空を切り／広がる手押し相撲の花野

- ・解凍に葉物は透けて駄目になる／そのとめどない回想と似て
- ・手をとってまた手をはなす／はなされた手がまた手をとる／渚と呼んだ

ここでは短歌体のみを抄出した。身体など事物への微細な眼差しから、ときに思いがけないワウダーな世界が広がっていく。その引き伸ばされた時間性が面白く感じた。言語的なマテリアリズムとも呼ぶべき作者か。

大西 美優（大学院生）

- ・フェミニストです、そして／黙るほどの／雪
- ・はつなつの性別欄に粹いくつ
- ・凍星が撫でる名の無い無精卵
- ・婚姻に押しつけられるシネラリア

主に俳句体による作者。とりわけ今年度の作品では、掲出したように「性別欄」、「無精卵」、「婚姻」など、性やジェンダーをめぐるモチーフに注目した。それらと季語を取り合わせることで、批評的な強度を秘めた作品を立ち上げている。

さいう（大学生）

- ・あるじの死／だけを／覚えているねこの／振れるめいおうせいの眼球
- ・打ち明けるべき／こと／幾多降り積もり／かいがらぼねへしずめる遺跡
- ・ろっこつのかたち／に／鳥をまもるとき／けやきの喉はよくしなる 弓

昨年度の口語詩句賞大賞受賞者。四行の特徴的な改行により比喻をくり出す修辭的な作風は、確実に進化しているように感じた。掲出した名詞（体言）により終止させるスタイルは、ひとつの完成の域に達しつつあるのではなかろうか。今後、まとまった作品集（歌集）としての評価も期待される作者だ。

金光 舞（大学生）

- ・さよならの度に生き方を忘れる／明日は鳥になれますように
- ・花火は／骨／のまま還るから／いなくなって／しまう
- ・体軀に囚われて／震えるたびに解けてゆく／青い鬼灯として／生きてゆきたい

ここでは短歌体のみを抄出した。どこか喪失感とそれに伴う自己愛を包みこみながら、瑞々しい青春性を表出させる。また、何より書くことの楽しさを感じさせるのも作者の美点か。一方、改行については、まだ検討する余地があるように感じる。

青木菓子（大学生）

- ・てにをはを散らして夜の喫煙所

- ・賞賛の後ふみつぶす蟻地獄
- ・以上でも以下でもなくて青葉闇
- ・脳みそを分け入ってみる四畳半

俳句体のみを抄出した。「蟻地獄」、「青葉闇」などの季語が含まれているものの、俳句と川柳の境界を行き来するような作品が目立つ。ナンセンス、痛烈なアイロニー、そして意味のゼロ地点など、そのユニークな作風に注目した。

森川 紬（大学生）

- ・撫でている撫でられている犬／使徒が来るなら私から
- ・君の眼差しが外れるところで／警鐘のような金木犀の匂い
- ・白い引っかき傷を浮かべ／入江の空には猫が住んでる

短歌体のみを抄出した。どこか日常の叙景のようでもありながら、不意に異なった次元が介入するような作品が魅力的だ。掲出作の「使徒」、「警鐘」、「猫」などの事物や存在が、異次元への入口となる作風に、とりわけ注目した。